

「活動の概要と研究成果」

NO.J2425

活動題目： 日本語学習とジェンダー：韓国の女性たちを中心に

所属：大阪公立大学

氏名： Yang, Jinsuk

植民地期の日本語教育研究は、これまで主に男性エリートによる公式教育機関での学習経験に焦点が当てられてきた。彼らは統治機構や知識人層への参入を前提に、体系的かつ文語中心の教育を受けていた。しかし近年、労働者階級を含む多様な階層の女性たちが、日常生活や労働の場など非公式なルートを通じて日本語を習得し、それを生存戦略として活用していた実態が明らかになってきた。

本研究は、1930～40年代の京城(現ソウル)におけるカフェの女給と日本人家庭で働いていた朝鮮人家事労働者「オモニ」に注目し、ナショナリズムの枠組みを超えてジェンダーと階級の交差性から彼女たちの日本語習得と使用実態を分析した。新聞記事や文学作品に描かれた彼女たちの姿を手がかりに、公式教育に依らない「生活の場」での言語習得とその社会文化的意義を読み解いた。植民地期の言語政策が一様な「同化」ではなく、ジェンダーや階級によって異なるかたちで作用し、受容されていたことを示すと同時に、女性たちの言語行為を通じた主体的実践を再評価することを目的とした。

分析の結果、女給たちは日本語を戦略的に用いて「モダン」な女性像を演出し、経済的自立を図っていた。中には日本名(芸名)を名乗り、日本語と朝鮮語を使い分けながら多様な客層に対応する高度な言語能力を発揮していた者もいた。一方、「オモニ」たちは日本家庭での労働を通じて新たな生活様式や価値観に触れ、より良い待遇を得るために日本語能力を磨いていた。彼女たちが日本家庭での勤務を選好した背景には、高賃金に加え、朝鮮家庭に見られる家父長的秩序からの相対的な自由があったことが示唆された。

本研究は、植民地期朝鮮における労働者階級の女性たちの言語経験を照射することで、これまで周縁化されてきた視点を提示した点が高く評価された。2024年11月には日韓国際学会(JKIAS)にて発表され、植民地言語政策やジェンダー研究の交差点として注目を集めたほか、研究成果は韓国の女性学分野で権威ある学術誌に採択され、2025年に論文として出版された。2025年度は引き続き、植民地期における女性の言語経験を探る一環として、日本に留学した朝鮮人女学生たちの日本語学習とその社会的意味に焦点を移し、分析を進めている。